

「神の愛が見えた」 ルカ 2：8～20

I 導入部

おはようございます。クリスマスおめでとうございます。アドベントクランツに四本のろうそくに火がともりました。全世界のキリスト教会でクリスマス礼拝が捧げられていることと思います。私たちも、この青葉台教会において、愛する一人ひとりの方々と共に、クリスマス礼拝をささげることができますことを感謝致します。

先ほどは、小川享子さん、藤田佳子さんの洗礼式が行われました。イエス・キリスト様の誕生をお祝いするクリスマス礼拝において、自分の罪を告白し、その罪の身代わりに十字架にかかり、よみがえられたイエス様を救い主と信じて救われ、神と人の前で洗礼式を受ける方が起こされましたことは本当に幸いです。小川享子姉、藤田佳子姉のこれからの信仰生活が祝福されますようにお祈りください。次は、あなたの番です。神様が導いておられることを知って下さい。第二礼拝後には、大原典子姉の入会式を行います。

先週の日曜日には、中高生会のクリスマス礼拝、クリスマス会が持たれ、昨日は教会学校の子どもクリスマス会がありました。幼稚科、女子組、男子組と毎週の分級の時間に練習された、それぞれの出し物を披露して下さいました。教師の方々のご苦勞に感謝致します。

さて、今日のクリスマス礼拝は、ルカによる福音書 2 章 8 節から 20 節を通して、「**神の愛が見えた**」という題でお話し致します。

II 本論部

一、恐れなくていい

8 節、9 節には、「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」とあります。

この羊飼いは、当時の宗教指導者たちからは、落ちこぼれ、ダメな人間、神から見放されている者であると軽蔑されていました。彼らは宗教指導者たちが教えていた、礼拝を守ること、手を洗うこと、ささげものをささげること律法、神の掟を何一つ守ることができない人々でした。羊飼いの、働きの性格上、常に羊と共に生活しなければならないので、宗教指導者たちが言う神の喜ぶことは何もできないでいたのです。

羊飼いたちが世話をしていた羊は、羊毛になり、食肉やミルクとなり、栄養源となっていました。または、神殿で神にささげるささげものとしても重要でした。このように羊自体は、ユダヤ人にとっては重宝されながらも、羊の世話をする羊飼いは、身分が低く、社

会の底辺、落ちこぼれ、不信仰な人々としてユダヤ人からは見下げられていたのです。

羊飼いたちは、野宿をしていました。暗闇の恐れ、獣たちの恐れがあり、彼らにとっては、朝の光を待ちわびていたのです。夜が明けて朝が来ると、羊飼いたちは、恐れから解放され、ほっとすることができたのです。彼らは夜、野宿しながら朝の光、太陽の光を待ち望んでいました。

しかし、この日の夜は、太陽の光でもなく、朝の光でもなく、別の光に照らされたのです。主の栄光が周りを照らしたのです。聖書は、羊飼いが恐れた、と記しています。

彼らにとっては、暗闇が恐れなのに、主の栄光、光が周りを照らし、その栄光の光に羊飼いたちは恐れたのです。神の権限、神のご支配、神の栄光に圧倒されたのです。

彼らの恐れは、暗闇を恐れるというようなことではなく、神の栄光に照らされて、自分の何もかもが神の前にさらけ出されるという恐れ、人間の弱さや醜い部分、恥ずかしい部分を照らし出すかのように、羊飼いたちは恐れたのです。

羊飼いたちは、自分たちは、神殿にもうでて祈りも礼拝もできない。祈ることもできない。ささげることもできない。神様のために、何か奉仕もできない。そのような思いがあったでしょう。ですから、神様を恐れたのです。さばかれるのではないか。神様のきよさと正義の前に、自分たちのような汚れた者、不信仰な者、落ちこぼれている者は、神様がお嫌いになる。神様を怒らせてしまうと恐れたのではないのでしょうか。しかし、み使いの第一声は、「**恐れるな**」(10節)だったのです。

私たちは、この1年間のキリスト者としての歩みを思う時、礼拝の姿勢や祈りの姿勢、捧げものや奉仕と、自分自身の足りなさや反省があるのかも知れません。神の栄光に照らされたとしたら、羊飼いと 同じように恐れるのかも知れません。自分の信仰の姿勢に、宣教の姿勢に不足と物足りなさとのゆえに、神様の前に恐れおののいてしまうように思うのです。しかし、神様は、イエス様は、恐れおののく私たちに、やはり「**恐れるな**」と語って下さるのです。どこまでも、主の恵みと憐れみに信頼したいと思うのです。

二、私たちと同じ所に立つキリスト

救い主誕生の知らせは、当時の宗教指導者やユダヤ人から見下げられ、落ちこぼれやダメな人間として見られていた羊飼いの所に伝えられたのです。また羊飼いたちは、神様の前に信仰的に落ちこぼれであり、宗教的な事柄は何もできないでいる不信仰な自分たちに救い主の誕生が、真っ先に知らされるとは夢にも思いませんでした。しかし、神様のお心は、思いは、最も弱く、小さく、誰にも知られることなく、ひっそりと生まれた救い主イエス様の誕生を真っ先に伝えるのは、羊飼いであるということでした。

天使は語りました。10節から12節のカッコです。「**恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。**」

民全体に告げる大きな喜びとして語りました。救い主の誕生は、全ての人にとって、大きな喜び、メガトン級の喜びなのです。ダビデの町、ベツレヘムで救い主が生まれたこと、

そして、メシアとしてのしるしは、サインは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている赤ちゃんだということです。ユダヤ人は、旧約聖書に預言されていた救い主を待ち望んでいたことでしょう。しかし、それは、飼葉桶に寝ている赤ちゃんというような弱い存在、小さい存在、普通の存在ではなく、力強く、偉大で、あっと驚くようなお方を救い主として想像していたのではないのでしょうか。羊飼いとて同じだと思ふのです。ですから、救い主のしるしが、飼葉桶に寝ている赤ちゃんだと聞かされて、ここにつまずきがあるようにも思ふのです。

イエス様は、ルカによる福音書7章23節で、「わたしにつまずかない人は幸いである。」と言われました。洗礼者ヨハネの使いが、「来るべき方は、あなたでしょうか。」と質問した時、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、」とイエス様の奇跡の業を示した後に語られた言葉でした。

弱い姿で、小さい姿で、家畜小屋という貧しい場所で、救い主として生まれたイエス様を救い主として、神として信じることにはつまずきが伴うようにも思ふのです。人間の世界では、早い者、強い者、数を持つ者、権威ある者、大きい者、賢い者が認められます。小さい者、弱い者、愚かな者は、端の方に追いやられてしまうのです。けれども、真の、偉大なる神、救い主イエス様は、神であるのにもかかわらず、弱い、小さい、みじめな、価値のないと思ふような姿でお生まれになったのです。

私たちが、たとえ、数を振りかざし、力を振りかざし、強さを振りかざし、権威を振りかざして大きく見せ、立派に見せようとも、私たちは弱いものなのです。小さい者なのです。罪深い者なのです。イエス様は、そのような私たちと同じ所に立って下さったのです。それが、飼葉桶に寝ている赤ちゃんなのです。イエス様は、私たちが経験する苦しみや悲しみや痛みを理解して下さるお方なのです。

三、福音を聞いたら行動を起こそう

救い主イエス様が、家畜小屋で貧しく、汚く、悲惨な姿でお生まれになったのは、「宿屋には彼らの泊まる場所は無かった。」とあるように、泊まる場所が無かったので仕方なく、やむを得ず生まれたというのでもなく、偶然にそこに生まれたというものではありません。「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」と天使が語ったように、これこそが、神様がご計画された救いの計画だったのです。このことは、神が意図されたことなのです。神ご自身が考えられた、唯一の救いの方法だったのです。

それはまた、救い主誕生の知らせが、真っ先に知らせられた羊飼いたちが、何の気兼ねもなく、安心して、いつものように、足を運べる場所、つまり、悪臭と汚さとに満ちた場所にイエス様がお生まれになったので、羊飼いたちは、「主が知らせてくださった出来事を見よう」ということができたのです。イエス様の誕生の場所が、神殿や宮殿や高級ホテル、豪邸であったならば、救い主の誕生の知らせを聞いても、羊飼いたちは、見に行くことはできなかったのです。神様は誰でも、どんな人でもイエス様の所に行くことができるように誕生して下さったのです。

逆を考えると、セレブの人は行けなかったのでしょうか。当時の王や祭司、宗教指導者たちには、救い主誕生の知らせは伝えられなかったのです。南青山での児童相談所設置の問題で、住民の方々のセレブ発言に、問題が起こっているようです。救い主イエス様は、セレブの人々、レベルの高い人のためにも、救い主として生まれて下さったのです。

その後、天使に天の大軍が加わり神を賛美したのです。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」 救い主の誕生を、大聖歌隊がほめたたえたのです。駅前キャロルの聖歌隊のように、神をほめたたえたのです。この讚美こそ、救い主が誕生したことのしるしであるとも思います。

羊飼いたちは、主の栄光が照らした時は恐れました。しかし、救い主誕生の知らせと天の大軍の賛美に勇気を与えられ、誕生された救い主を見に出かけたのです。グッドニュースを聞いただけで終わってしまうのではなく行動する、一歩前進するということなのです。

羊飼いたちは、天使が救い主として語った通りに、飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てたのです。羊飼いは、それにとどまらず、天使が自分たちに語った救い主の誕生について人々に知らせたのです。グッドニュースは、聞いた自分の所に留めておくのではなく、グッドニュース、良き知らせなのですから伝えるのです。話すのです。18節には、「聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った。」とあります。聞いた人が、どのような反応をするのかは、私たちの責任ではありません。私たちの責任は、聞いた以上、その内容を伝えることなのです。後は、神様とその人の問題なのです。

私たちは、聖書を通して、イエス様が救い主として、クリスマスに生まれて下さった事、イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んで下さったこと、墓に葬られましたが三日目によみがえられたことを知っています。知るだけではなく信じました。ですから、この良き福音を、他の人に、愛する人に、大切な人に伝えたいと思うのです。その最大のチャンスがクリスマスです。明日のキャンドルサービスです。私たちは、明日のキャンドルサービスを用いて、良き知らせ、グッドニュースを伝える機会としたいのです。

Ⅲ結論部

羊飼いたちは、救い主の誕生、神が人となって、赤ちゃんの姿でお生まれになったことを聞き、見て、信じました。そして、喜びに満たされたのです。つまり、彼らは神様の愛を見たのです。イエス様の誕生は神様の愛そのものです。イエス様は、死ぬために、そして、私たちの罪の身代わりに十字架にかかるために生まれて下さったのです。ここに愛があるのです。洗礼を受けられた小川享子姉も藤田佳子姉も、いろいろな所を歩いてこられたでしょう。苦しみや悲しみを経験されたでしょう。すべてはイエス様に出会うためだと信じます。私たちもまた、同じだと思うのです。私たちはイエス様に出会い、神様の愛を体験できるのです。命を投げ出してまで、私たちを愛し、守り拭いたイエス様、神様の愛は、2018年の私たちの全ての歩みに注がれていたのです。そして、2019年の歩みにも、神様の愛、イエス様の愛が変わらず注がれるのです。大丈夫、安心しなさい。私だと言われるイエス様がこの週も共におられます。何があっても、「恐れるな」と声をかけて下さり、私のそばに、あなたのそばに共におられるのですから、安心して歩みましょう。